

【書式B】

施設名 東京文化財研究所

処理番号 5115-00

(様式 1)

業務実績書

研究所 No44

中期計画の項目	5 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
プロジェクト名称	文化財保存施策の国際的研究 ((1)-①)		
【事業概要】			
<p>日本国内における文化財保護政策・施策の充実に、また日本が行う国際協力事業の円滑な実施に必要とされる、文化財の概念やその保護の理念、保護のための各種施策に関する国際情報を収集し分析、報告する。また文化遺産に関する国際ワークショップを国内外で開催してこれら情報の共有の場を提供することにより専門家国際ネットワークの構築を図り、文化遺産分野での日本の国際貢献、日本からの情報発信に寄与する。これらの事業により得た国際情報は、国際情報データベースに蓄積、また国際資料室に配架して公開する。</p>			
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【プロジェクト責任者】	センター長 清水真一
【スタッフ】			
<p>清水真一、岡田 健、山内和也、朽津信明、二神葉子、友田正彦、江草宣友、廣野 幸、高多加奈子、今井健一朗、宇野朋子、有村 誠、影山悦子、秋枝ユミイザベル、邊牟木尚美、島津美子、鈴木 環（以上、文化遺産国際協力センター）、前田耕作、ウーゴ・ミズコ（以上、客員研究員）</p>			
【主な成果】			
<p>文化財保存施策の国際的研究について、以下の事業を実施した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 世界各地で開催された研究会やワークショップに積極的に参加し、文化財の保存に関わる各種の情報を収集し、分析した。 2. 国際ワークショップの開催：アジア各国の専門家を招へいしてアジアの文化財について考えるラウンドテーブル形式の国際会議を1回、国内外の専門家を講師とする一般公開の国内専門家向け研究集会を1回、計2回開催した。 			
【年度実績概要】			
<ol style="list-style-type: none"> 1. 文化財保存施策に関する国際情報の収集・分析、活用 <p>世界各地で開催された研究会やワークショップに積極的に参加し、文化財の保存に関わる各種の情報を収集し、分析した。主なものは以下である。シルクロードの世界遺産一括登録に関するユネスコ作業部会（西安）。ユネスコ世界遺産委員会（ケベック）。タンロン皇城遺跡の保存に関するワークショップ（ハノイ）。東アジア木造建造物の彩色・塗装の保存に関する国際セミナー（北京）。</p> 2. 文化遺産国際ワークショップの開催 <p>アジア文化遺産国際会議：東南アジアの専門家をタイ王国に招聘し、「被災後の遺跡の修復と保存」をテーマとした専門家会議を開催した（日時：2009年1月14～16日、場所：バンコク市及びアユタヤ市）。</p> <p>国際文化財保存修復研究会：上記会議が外国人専門家・機関を主たる参加者として国際的な連携の構築を目指しているのに対し、本研究会は、日本国内への国際情報の発信と、国際協力に関する国内専門家の情報交換・連携強化を目的として国内向け一般公開の研究会として開催している。本年度は、「遺跡保存と水」をテーマに開催し（日時：2008年9月19日、場所：東京文化財研究所セミナー室）、それに伴う報告書を刊行した。</p> 			
【実績値】			
<p>国際ワークショップ開催件数： 2件 報告書刊行件数： 2件 (①,②) 外国人招へい者数： アジア文化遺産国際会議：6人 国際文化財保存修復研究会：2人 国際ワークショップのうち一般公開分（国際文化財保存修復研究会）参加者数： 75人 国際ワークショップのうち一般公開分（国際文化財保存修復研究会）参加者満足度： 100%</p>			
【備考】			
<ol style="list-style-type: none"> ①国際文化財保存修復研究会報告書「遺跡保存と水」08.12 ②「Restoration and conservation of immovable heritage damaged by natural disasters」09.01 			

【書式B】

施設名 東京文化財研究所

処理番号 5115-00

(様式2)

自己点検評価調書

研究所 No44

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観点	ワークショップ 開催件数	参加者数	満足度	報告書刊行件数		
判定	A	A	A	A		
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財保存施策に関する調査研究事業は予定通り終了し、日本の文化財保護施策の策定に有効な情報を収集し、国際情報データベースの充実に貢献した。国際・国内ワークショップも所定の成果をあげ、国際情報の交換、専門家ネットワークの構築、国内外への情報発信に貢献した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究、国際・国内ワークショップとも、これまでの成果をもとに、それらを着実に発展させる形で実現できたと考える。調査研究については、今後もこのペースを維持しつつ事業を進め、国内の文化財保護施策の充実に貢献する。国際ワークショップについては今後とも国際的に時宜を得たテーマの開発に力を注ぎ、専門家ネットワークの構築、国内外への情報発信に貢献する。

中期計画の項目	5 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
プロジェクト名称	アジア諸国における文化遺産を形作る素材の劣化と保存に関する調査研究 ((1)-②-ア)		
【事業概要】			
<p>アジア諸国では、煉瓦、土、石など、各地の遺跡に共通して用いられている材料が認められる。本研究では、地域で区切って研究を行うのではなく、各文化財に共通して用いられている素材を調査・研究することから、その素材で形作られた多くの文化財の保存修復に寄与することを目的とする。具体的には、材料の物性とその劣化に関する基礎的な研究を行うことから、それぞれの材料が劣化しにくい条件を考察し、材料に対して、あるいは遺跡の環境に対して、材料劣化を起しにくい条件を与えることで、文化財の保存修復に貢献する。</p>			
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【プロジェクト責任者】	主任研究員 朽津信明
【スタッフ】			
清水真一、二神葉子、宇野朋子（以上、文化遺産国際協力センター）、銚井修一、柏谷博之（以上、客員研究員）			
【主な成果】			
<p>石材表面への微生物繁茂を軽減するために、表面に撥水剤を塗布することの効果とその弊害について具体的に検証した。そうした微生物を繁茂しにくくする環境条件について、タイのスコータイ遺跡で検討した。さらに、微生物が石材の風化に与える影響について、カンボジアのアンコール遺跡において検討した。また、タイとのこれまでの共同研究成果を公表する報告会をバンコクで開催した。</p>			
【年度実績概要】			
<p>石材の表面に微生物が繁茂することを避ける目的で、石材表面に撥水剤が塗布される形で保存対策が取られる場合が少なくないが、過去にそうした撥水処理が施された文化財について、その後の状況を詳細に調べることから、撥水処理の効果と弊害について検討した。その結果、直接雨の影響がない部分では、処理後 20 年が経過しても引き続き効果が持続し、微生物繁茂が起きていないのに対して、表面に凹凸があり、日射が乏しく水分蒸発が乏しい部位では、たとえ撥水効果は持続していても、石材に染み込めない水の影響でかえって微生物繁茂が促進されている状況が明らかにされた。これは、撥水処理を行うためには、部位の環境条件を十分に理解し、適切な環境において実行される必要があることを示している。</p> <p>こうした基礎研究を受けて、タイ・スコータイ遺跡においては、具体的にどのような環境であれば撥水処理の効果が得られ、どのような環境であればかえって弊害が引き起こされるかについて現地調査を進めた。具体的には、遺跡周辺の温度・湿度・風速・風向・日射などの各種環境データを計測するとともに、微生物が繁茂している部位としていない部位とにおける蒸発量の違いを計測し、現実に撥水効果が得られやすい環境条件と弊害を起し得る環境条件とについて解析した。また、カンボジア・アンコール遺跡群のタ・ネイ遺跡において、砂岩の試料を多数作成し、その強度や帯磁率に関する初期条件を計測した後、微生物が繁茂しやすいと想定される環境としにくいと想定される環境とにそれぞれを設置し、その後の変化を調べる実験を開始した。試料の中には既に微生物が繁茂し始めたものもあり、そうしたものでは強度低下が観察され始めている。こうした解析が、遺跡で今後適切に生物繁茂を軽減していく方向を検討することに貢献すると期待される。</p>			
【実績値】			
報告書刊行	2冊	(①,②)	
論文掲載数	2編	(③,④)	
学会発表数	3件	(⑤～⑦)	
【備考】			
①『アジア諸国における文化遺産を形作る素材の劣化と保存に関する調査・研究 平成 20 年度成果報告書』09.03			
②『Conservation of monuments in Thailand IV』 08.12			
③朽津信明・二神葉子「飯田市・文永寺石室五輪塔における蘚苔類の繁茂について」『保存科学』47 pp.111-120 09.03			
④朽津信明「いわゆる「宋風獅子」の岩質について」『考古学と自然科学』58 pp.1-11			
⑤朽津信明「表面に微生物が繁茂する石材の表面風化状況について」日本応用地質学会平成 20 年度研究発表会 横浜市開港記念会館 08.10.30, 31			
⑥川本伸一・銚井修一・小椋大輔・宇野朋子「スコータイ遺跡における仏像の保存に関する研究 周辺気象の計測と藻の繁茂状況」日本建築学会大会 08.09			
⑦朽津信明・二神葉子「飯田市・文永寺石室五輪塔における蘚苔類の繁茂について」日本文化財科学会第 25 回大会 鹿児島国際大学 08.6.14,15			

【書式B】

施設名 東京文化財研究所

処理番号 5125-10

(様式2)

自己点検評価調書

研究所 No45

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	報告書刊行数	論文掲載数	学会発表数			
判定	A	A	A			
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	報告書刊行、論文数、学会発表件数ともに、計画通りの数字が得られたことからAと判断した。また、順調にデータが蓄積されていることから、次年度にも同等の成果が期待される。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当初の計画通り、順調にデータが蓄積されている。次年度以降もさらに継続してデータを増やす予定である。

中期計画の項目	5 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
プロジェクト名称	カンボジア・アンコール遺跡群の西トップ寺院遺跡の建築史的、考古学的、保存科学的調査 ((1)-②-A)		
【事業概要】 カンボディア王国アンコール遺跡群において、現地のAPSARA機構と共同研究を行い、文化遺産の保護と人材育成に貢献する。平成 18 年度から新たな中期計画に基づき西トップ寺院を対象とした共同研究を継続した。			
【担当部課】	企画調整部	【プロジェクト責任者】	展示企画室長 杉山 洋
【スタッフ】 肥塚隆保、高妻洋成 [以上、埋蔵文化財センター]、豊島直博、林正憲、大林潤、番 光 [以上、都城発掘調査部]、石村智 [企画調整部]、清水重敦 [文化遺産部]			
【主な成果】 6月5日と6日に現地で開催された本年第1回目の国際調整委員会へ参加。本年第1回目の調査は8月1日から13日の間、考古班と建築班が実施した。11月には雨期を経過した後の遺跡の状態確認の現地調査を行った。12月1日と2日に第2回目の国際調整委員会に参加。1月29日から2月7日の間、第2回目の調査を考古班と保存科学班が行った。招聘事業は3月23日から31日まで。若手研究者2名を招聘した。			
【年度実績概要】 本年はまず6月5日と6日に現地シエムリアップで開催された国際調整委員会へ参加し、西トップ寺院の調査成果と今後の計画を発表した。さらにこの時期に合わせ西トップ寺院の状態等の調査を行った。西トップ寺院の状態は年々悪化しており、本年5月に前面の40石あまりが落下している。この状況をもとに今回現地でアプサラの遺跡維持管理担当者と今後の西トップ寺院の応急保護対策を話し合った。次に本年第1回目の調査として8月1日から13日の期間で考古班と建築班の調査を行った。考古班は南小塔の南西部にトレンチを設定し、南小塔付近の基礎状況の調査を行った。基壇東面に磚を組み合わせた遺構が検出された。建築班は中央塔を中心に図面の作成に当たった。11月には雨期を経過した後の遺跡の状態確認のために現地調査を行った。12月1日と2日に現地で本年第2回目となる国際調整委員会が開催された。1月29日から2月7日にかけて本年第2回目の考古班の調査を行った。今後は保存科学班による保存科学的基礎調査を行うとともに、来年度以降に予定される西トップ寺院の報告書作成に備え、出土遺物の基礎調査を行った。合わせて昨年度、外務省所管の草の根無償援助で建設されたタニ窯跡群の遺跡博物館について、その展示についての指導助言と、当研究所で発掘した遺物の選定を行った。 本年度の招聘事業は3月23日から31日まで、若手研究者2名を招聘し、研究所の活動を始め、日本の考古学調査の概要を視察した。			
			
			西トップ寺院(東から)
【実績値】 国際会議での発表 2回			
【備考】 ① 国際調整委員会 ソキメック ホテル 2008.6.2-3 ② 国際調整委員会 ソキメック ホテル 2008.12.1-2			

【書式B】

施設名 奈良文化財研究所

処理番号

5125-11

(様式2)

自己点検評価調書

研究所 No46

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	A	A	A		
備考						

2. 定量的評価

観点						
判定						
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	20年度も当初予定した調査予定を順調に進行することができた。また、中央塔に関する様々な事実を明らかにすることができた。招聘事業も確実に進行し、相手国文化財保護機関からも一定の評価を得ることができた。以上の進捗状況を総合的に判定してAとした。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	20年度の計画を当初の予定どおり遂行したことから、当事業は順調であると判定した。

中期計画の項目	5 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
プロジェクト名称	龍門石窟及び陝西省唐代陵墓石彫像の保存修理に関する調査研究 ((1)-②-イ)		
【事業概要】			
中国龍門石窟の保存に協力するため、龍門石窟研究院との緊密なパートナーシップを構築し、龍門石窟の現状を詳細に調査し、保存修復の方法についての研究と具体的な処置、人材の養成などを実施する。陝西省所在の唐時代の乾陵、橋陵、順陵に附属する石彫像の保存修理に関して、科学的研究と保存修理作業を行うと共に、石彫像保存地区の保存計画策定の研究を行う。			
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【プロジェクト責任者】	保存計画研究室長 岡田 健
【スタッフ】			
清水真一、杉崎佐恵 (以上、文化遺産国際協力センター)			
【主な成果】			
2 つの調査研究が本年度で終了するにあたり、龍門石窟研究院に対する助言を行うとともに、これまでの活動を総括し広くその内容を紹介するパンフレットを作成した。また西安市で石造文化財の保存に関するシンポジウムを開催し、報告書を作成した。			
【年度実績概要】			
1) 龍門石窟の保護に関する指導助言			
7月14日～17日の日程で龍門石窟へ赴き、龍門石窟の保護に関して、環境、修復技術、管理運営等の各項目を現地で精査し、龍門石窟研究院及び同石窟で修復作業を担当している中国文化遺産研究院等に対して指導助言を行った。			
2) 石造文化財の保存に関するシンポジウム			
陝西省唐代陵墓石彫像保護修復事業（文化財保護・芸術研究助成財団からの受託事業）と本プロジェクト「龍門石窟及び陝西省唐代陵墓石彫像の保存修理に関する共同研究」が本年度で終了するにあたり、11月17日、18日の日程で西安市において「石造文化財の保存に関するシンポジウム」を開催し、その成果を中国各機関・大学等の専門家に披露するとともに、各種の問題について意見交換と交流を図った。			
主催 西安文物保護修復センター（中国国家文物局石質文物保護科学研究重点基地）/ 東京文化財研究所			
参加者 中国国内の石造文化財の保存に携わる専門家 約30名/ 日本側参加者 4名			
研究会内容			
森井順之（東文研） 九州臼杵摩崖石仏覆い屋建造後の環境観測			
友田正彦（東文研） 石造遺跡の保存管理—アンコール遺跡群の場合—			
津田豊（(株)ジオレスト：UNESCO龍門プロジェクト専門家） 龍門石窟の結露現象			
方雲（中国地質大学・武漢） 順陵石刻の亀裂変形観測			
甄広全（西安文物保護修復センター） 石質保護材料研究			
朱一清（中衛康隆ナノ科技發展公司） 石質文物保護材料とその評価体系			
万俐（南京博物院） 江蘇句容貌山華陽洞摩崖題刻の保護			
馬濤（西安文物保護修復センター） 乾陵石刻の表面保護処理			
3) 報告書の作成			
2 つの調査研究が本年度で終了するにあたり、龍門石窟に関してはこれまでの活動の全貌を示すパンフレット「世界遺産・龍門石窟の保護のための国際協力—その足跡と成果—」を、陝西省唐代陵墓については各年の成果をまとめた報告書「日中共同唐代陵墓石彫像保護修復プロジェクト～その経緯と成果～」を作成した。			
【実績値】			
研究会 1回			
報告書 1冊			
【備考】			
報告書「日中共同唐代陵墓石彫像保護修復プロジェクト～その経緯と成果～」09.3			

【書式B】

施設名 東京文化財研究所

処理番号 5125-20

(様式2)

自己点検評価調書

研究所 No 47

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性			
判定	A	A	A			
備考						

2. 定量的評価

観点	報告書作成	研究会				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査研究の最終年度として、成果のまとめを行った。陝西省での活動実績が評価され、次年度からの陝西省考古研究院との新たな共同研究（墳墓壁画の記録保存の方法研究）へのスムーズな移行が実現されようとしている。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	その進捗度、従来の水準を維持しつつ比較的堅調に実現できたと考える。

中期計画の項目	5 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
プロジェクト名称	敦煌壁画の保護に関する共同研究 ((1)-②-イ)		
【事業概要】			
<p>敦煌壁画に関して、敦煌研究院と共同で調査研究を行う。これは、壁画の制作材料と技法を古代のシルクロードを通じた文化交流、技法・材料の移動という観点から研究し、敦煌壁画を総合的に理解しようとするものである。具体的な研究項目としては、1)壁画制作技法・制作材料に関する光学的方法及び分析的方法を用いた総合研究、2)放射性炭素年代測定法による主要窟の年代同定に関する研究、3)日中の若手研究者育成、を実施している。</p>			
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【プロジェクト責任者】	保存計画研究室長 岡田 健
【スタッフ】			
<p>山内和也、朽津信明、谷口陽子、宇野朋子、高林弘実、津村宏臣（以上、文化遺産国際協力センター）、舛井基充（東京美術倶楽部）、中村俊夫（名古屋大学）、齋藤努（歴史民族博物館）</p>			
【主な成果】			
<p>共同調査・研究は3年目を迎え、壁画の制作材料と技法に関する知見の蓄積が進みつつある。写真撮影作業は天井の全景を含む全てが完了した。光学調査と分析調査は、未着手の部分での作業とここまでの検討で不十分な部分での作業を反復して行っている。日中双方のメンバーの連携が取れ、作業の一部分を完全に中国側に委託することが可能になるなど、顕著な進歩が見られる。</p>			
【年度実績概要】			
<p>1) 合同調査：6月1日～6月29日の日程で、前年度に引き続き第285窟天井の壁画に対する写真撮影、その他の壁面に対する研究に必要な資料写真の撮影を行った。各壁の壁画の状態記録作業を継続実施した。第285窟において14C年代測定に供する試料18点の再採取を行った。</p> <p>2) 第285窟の光学調査：8月、第285窟東壁・北壁の銘文について、敦煌研究院保護研究所のメンバーが光学調査を行った。</p> <p>3) 合同調査：9月6日～10月19日の日程で、第285窟壁画に蛍光X線と分光光度計を用いた非接触分析調査を実施した。夏季に実施した光学調査のデータをもとに第285窟東壁・北壁の銘文について確認調査を実施した。鉛同位対比に関する研究に関連して鉛系顔料を使用した壁画について、莫高窟各窟で観察を行った。3次元デジタルスキャンを用いて第285窟内の記録を行った。建築史的視点から莫高窟各窟の観察を行った。</p> <p>4) 敦煌派遣研修：6月1日～10月19日の日程で、日本から大学院修士課程修了の研修員2名を敦煌に派遣した。</p> <p>5) 国際シンポジウムでの発表：9月22日～24日の日程で敦煌研究院で開催された「2008古遺址保護国際学術討論会」で「環境と石窟の劣化に関する研究」と題して報告を行った。</p> <p>6) 敦煌研究員の来日研究：1月22日～3月14日の日程で、郭青林研究員が来日し、名古屋大学年代測定センターにおいて14C年代測定に関する試験と研究を行った。2月3日～3月14日の日程で、柴勃隆研究員が来日し、東京文化財研究所において劣化状態調査、光学調査で収集したデータの整理と検討を行い、データベース構築のためのGISを応用したシステム開発のための研究を行った。</p> <p>7) 共同研究についての討議：2月22日～25日の日程で、敦煌研究院において本年度作業の総括と、次年度以降の研究計画について討議を行った。今後2年間で実施するデータベース構築に向けて、具体的な体制作り着手した。第285窟で実施する測量作業について、同研究院考古研究所の担当者と打合せを行った。</p> <p>8) 報告書の作成：東京文化財研究所と敦煌研究院両者共同の2008年度成果報告書を編集し、発行した。</p>			
【実績値】			
<p>報告書 1冊 (①) 学会発表 1回 (②) 国際シンポジウム発表 1回</p>			
【備考】			
<p>①報告書「敦煌壁画の保護に関する日中共同研究2008」09.3 ②敦煌莫高窟第285窟壁画に使用された彩色材料の非破壊分析（高林弘実ほか） 文化財保存修復学会第30回大会 08.5.17</p>			

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観点	報告書作成					
判定	A					
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	シルクロード沿線の壁画研究が注目される中、近年開発が進んでいる可搬型観測機器の導入、積極的な外部研究機関との連携などが実現し、調査による新たな発見に基づく研究方法の改善、科学的分析手法の確立も順調に行われているため、Aと判定した。敦煌研究院との研究者同士の意思疎通も順調に図られていて、研究の一層の発展が期待できる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	これまでの経験を生かしつつ、堅調に実現できたと考える。研究の進展とともに研究項目が増えており、人員配置、報告書への反映の仕方など、改善すべき点を見直しつつ、次年度へ向けて順調に作業を進めている。

中期計画の項目	5 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
プロジェクト名称	西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業 ((1)-②-ウ)		
【事業概要】			
西アジア諸国の文化財の保護・保存・修復に関する協力・支援事業の一環として、とくに内戦・紛争によって破壊の危機にさらされているアフガニスタン及びイラクの文化財の調査研究を行い、それに基づいて文化財保護支援事業の優先順位を定め、破壊された文化財の保存・修復事業を通して、関連する分野の技術移転を図るとともに、当該国から強い要請を受けている人材育成を行い、自国民の手による文化財保護事業の確立の支援を目指す。また、あわせて周辺地域（特に中央アジア、インド）の文化財の調査研究を実施する。			
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【プロジェクト責任者】	センター長 清水真一
【スタッフ】			
山内和也、朽津信明、宇野朋子、有村 誠、影山悦子、島津美子、邊牟木尚美、鈴木 環（以上、文化遺産国際協力センター）、前田耕作、岩井俊平、西山伸一、谷口陽子（以上、客員研究員）、小林謙一、井上和人、窪寺 茂、森本 晋、石村智、脇谷草一郎（以上、奈良文化財研究所）、中村俊夫（名古屋大学）、佐々木達夫（金沢大学）、木口裕史（株式会社パスコ）、島 馨（応用地質株式会社）			
【主な成果】			
アフガニスタン及びイラクから文化財専門家を招へいして人材育成・技術移転を実施。バーミヤーン遺跡の保存に関し、専門家会議への出席、報告書の作成・出版、外部機関との共同研究を実施。西アジア周辺諸国における文化遺産保護に関する調査・研究等としては、タジキスタン出土の壁画片の保存修復及び文化財専門家の人材育成・技術移転、アジナ・テパ仏教寺院の保存修復、アジャンター壁画の保存修復を実施し、あわせて国際会議等へ参加。			
【年度実績概要】			
1. アフガニスタン：(1)文化財専門家研修事業（ユネスコ受託事業と連携）①考古学専門家の人材育成・技術移転：7月18日～12月22日、考古学研究所研究員2名（受託事業による招へい者1名）②バーミヤーン仏教石窟出土の権皮文書の保存修復及び専門家の人材育成・技術移転：11月13日～1月30日、カーブル博物館職員2名（受託事業による招へい者2名）(2)バーミヤーン遺跡保存のための専門家会議への出席（6月12、13日、ミュンヘン、3名）(3)報告書の出版（備考欄の報告書①～④）(4)外部機関・団体との共同研究等：金沢大学（アフガニスタン・バーミヤーン遺跡出土陶器の研究）、株式会社パスコ（バーミヤーン石窟遺構の現状記録調査のための研究）、株式会社応用地質（バーミヤーン遺跡保存のための崖崩壊予測および地下探査に関する研究）、同志社大学（アジナ・テパ遺跡における遺跡環境アセスメントとデジタルアーカイブ）、名古屋大学年代測定総合研究センター（バーミヤーン仏教壁画の年代測定）			
2. イラク：(1)文化財専門家研修事業（ユネスコ受託事業と連携）：7月1日～12月10日、イラク国立博物館職員2名（受託事業による招へい者2名）			
3. 西アジア周辺諸国における文化遺産保護に関する調査研究等：(1)タジキスタン国立古物博物館所蔵の壁画片の保存修復及び文化財専門家の人材育成・技術移転（文化遺産国際協力拠点交流事業と連携）(2)タジキスタン、アジナ・テパ仏教寺院の保存修復（ユネスコ受託事業と連携）(3)インド：アジャンター壁画の保存修復（文化遺産国際協力拠点交流事業と連携）(4)国際会議等への参加：UNESCO Sub-regional Workshop on Serial Nomination for Central Asian Petroglyph Sites（5月27日～31日、1名）、UNESCO Sub-regional Workshop on the Serial World Heritage Nomination of the Silk Roads（6月2日～5日、2名）			
【実績値】			
招へい者数：6名 職員派遣数：17名 報告書作成：4件（①～④） 学会発表件数：2件（⑤,⑥）			
【備考】			
①バーミヤーン遺跡保存事業概報－2007年度（第8次ミッション）－			
② <i>Preliminary Report on the Safeguarding of the Bamiyan Site 2007-8th Mission-</i>			
③バーミヤーン仏教石窟出土権皮仏典の保存修復			
④ <i>Preliminary Report on the Environmental Investigation for the Conservation of the Bamiyan Site: 2005 and 2006 Seasons</i>			
⑤アフガニスタン・バーミヤーン仏教壁画に関する調査と成果 09.3.15			
⑥タジキスタン、アジナ・テパ仏教寺院の保存事業－2008年度の成果－ 09.3.15			

【書式B】

施設名 東京文化財研究所

処理番号 5125-30

(様式2)

自己点検評価調書

研究所 No49

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	招へい者	職員派遣数	報告書作成数	発表件数		
判定	A	A	A	A		
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	アフガニスタン、イラクに関しては、治安等の問題に配慮しつつ、人材育成・技術移転等の可能な事業を効率的に実施しており、成果が上がっている。また、周辺諸国の文化遺産保護に関しても、人材育成・技術移転を核として、着実に成果を上げている。以上の点からAと判断した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	治安情勢等の様々な問題に配慮しながらも、計画に沿って事業が実施されており、着実に成果が上がっている。

中期計画の項目	5 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
プロジェクト名称	諸外国の文化財保存修復専門家養成 ((2)-ア)		
【事業概要】			
文化遺産の保存修復を実施するためには、経験豊かな修復専門家の関与が必要不可欠である。しかし紛争や治安の不安定な状態が長期間続いた国々では、文化遺産を保存・修復する人材が決定的に不足しており、その養成が緊急的課題になっている。そのため諸外国における専門家の研修を実施する際の教材として使用することを目的にし、DVD 映像とテキストを作成する。			
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【プロジェクト責任者】	センター長 清水真一
【スタッフ】			
山内和也、朽津信明、宇野朋子、大場詩野子、大久保伊織、広野 幸（以上、文化遺産国際協力センター）、青木繁夫（客員研究員）、西尾太加二（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所）			
【主な成果】			
諸外国における専門家の研修を実施する際の教材として使用することを目的にして、次の教材を作成した。すなわち、1. 「水浸木材の保存修復」DVD。2. 「水浸木材の保存修復」テキスト。3. 「Conservation for water logged wood」テキスト、である。これらは、遺跡から出土した水浸木材の適切な修復方法をしているばかりではなく、そもそも遺跡から脆弱な水浸木材を取り上げる方法にまで言及しており、発掘から保存まで広く網羅した内容に仕上がっている。			
【年度実績概要】			
諸外国における専門家の研修を実施する際の教材として使用することを目的にした。			
<p>「水浸木材の保存修復」(DVD) は、遺跡などのから出土した木質遺物の変形を防止し、形状を保ちながら後世に残すための保存修復処置の方法を DVD20 分程度にまとめた。特に、修復処理だけではなく、発掘時に脆弱な水浸木材を遺構から取り上げる方法についても解説したことから、発掘から保存公開までを網羅した、完全版としての映像を完成することができた。内容としては、実際の修復現場で行われている一般的な複数の手法と手順を映像としてまとめたものを英語と日本語のナレーションで作成した。研修対象者に説明し、英語・日本語の言語での説明以外に、映像として残すことで水浸木材の修復処置方法を的確に分かりやすく説明することが可能になり、利用しやすくなった。</p> <p>「水浸木材の保存修復」(テキスト) は、上記DVDのテキスト版に相当するが、DVD映像だけでは含まれなかった詳細等を記述し、また適度に簡潔にすることで参照しやすくなった。参考文献や使用した道具類の入手先を掲載することで参考にしやすくなったと考える。文化財の保存修復に関わる専門家の研修や同様の文化財を取り扱う担当者への解説として効率的な活用が可能となった。</p> <p>「Conservation for water logged wood」テキストは、上記テキストの英語版に当たる。これにより、同内容を海外の研究者、研修生なども参照できるようになった。</p>			
【実績値】			
DVD編集 1巻 (①) テキスト作成 2冊 (②,③)			
【備考】			
① 文化遺産国際協力センター編集 「水浸木材の保存修復」DVD 09.03 ② 文化遺産国際協力センター編集 「水浸木材の保存修復」テキスト 09.03 ③ 文化遺産国際協力センター編集 「Conservation for water logged wood」テキスト 09.03			

【書式B】

施設名 東京文化財研究所

処理番号 5205-10

(様式2)

自己点検評価調書

研究所 No50

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性		
判定	A	A	A	A		
備考						

2. 定量的評価

観点	DVD作整数	テキスト作成数				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	計画通りにDVDとテキスト作成が出来たので、Aと判断した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	DVDとテキストが完成し、当初の計画通り順調に進行している。次年度もそれぞれのテーマごとに引き続き製作していく予定である。

【書式B】

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 5205-20

(様式 1)

業務実績書

研究所 No51

中期計画の項目	5 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
プロジェクト名称	国際協力機構、ユネスコアジア文化センター等が実施する研修への協力 ((2)-イ)		
【事業概要】			
諸外国に対して文化財の保存・修復に関する技術移転を積極的に進める。また、アジア諸国の文化財保護担当者や保存・修復専門家などの人材養成に関する支援事業を国内外で実施するとともに、人材養成に必要な教材や教育手法に関する研究開発を行う。			
【担当部課】	企画調整部	【プロジェクト責任者】	国際遺跡研究室長 井上和人
【スタッフ】			
小林謙一、石村智、脇谷草一郎、中村一郎、杉山洋 [以上、企画調整部]、高妻洋成、大河内隆之 [以上、埋蔵文化財センター]、島田敏男、黒坂貴裕、難波洋三、馬場基、今井晃樹 [以上、都城発掘調査部] 平澤毅、内田和伸、栗野隆、清水重敦 [以上、文化遺産部]			
【主な成果】			
国際協力機構及びアジアユネスコ文化センターが計画した研修の多くの部分を担当した。参加者はアジア太平洋地域諸国で文化財の保護に携わる、まだ経験が十分でない研究者であり、今般の各研修により、研修生に対して有益な成果をもたらすことができた。			
【年度実績概要】			
ユネスコアジア文化センター (ACCU) 及び国際協力機構 (JICA) が実施する諸研修事業に協力した。			
① ACCU の実施する文化遺産保護に資する研修 2008 (個人研修・ウズベキスタン 3 名) への協力 ウズベキスタンから招聘した 3 名の研究者に対して保存科学に関わる研修を実施した。 担当：埋蔵文化財センター 期間：2008 年 7 月 17 日～7 月 31 日			
② ACCU の実施する文化遺産保護に資する研修 2008 (集団研修・アジア太平洋地域 16 名) への協力 遺跡の整備と管理・遺跡遺物の保存科学・遺物の記録方法・年輪年代法に関する研究を実施した。 担当：企画調整部・都城発掘調査部・埋蔵文化財センター 期間：2008 年 9 月 17 日～9 月 29 日			
③ ACCU の実施する文化遺産の保護に関する研修 2008 (個人研修・カンボジア 3 名) への協力 カンボジア・アンコール遺跡保護整備局からの招聘研究者に対して遺跡博物館及び遺跡の管理に関する研修を実施した。 担当：企画調整部・文化遺産部 期間：2008 年 11 月 19 日～12 月 1 日			
④ JICA の実施する文化遺産の保護と活用に関する研修 (ベトナム 11 名) への協力 町並み保存に関する講義、見学を実施した。 担当：企画調整部・都城発掘調査部 期間：2009 年 2 月 25 日～3 月 4 日			
【実績値】			
研修回数 4 回 研修生数 30 名			
【備考】			

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	研修回数	研修生数				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	国際協力機構及びアジアユネスコ文化センターからの協力依頼に全面的に応じて、充実した内容の研修を実施することができたから、Aと判定した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	例年と同様に、研修主催機関からの要請に最大限応じて、アジア太平洋地域から招聘した各国で文化財保護についてこれから重要な機能を果たすことになる若手の研究者達に十分な基礎知識などを伝達することができ、国際貢献に大いに資することができたから、Aと判定した。